
詩集 想いを羅列

樹歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詩集 想いを羅列

【Nコード】

N1409B

【作者名】

樹歩

【あらすじ】

愛する人のいるすべてのひとへのつたない詩集です

“ 恋心その3 ”

『 隣の手 』

暗闇の底 わずかの月灯かりを探す
虚ろな目

また 目が醒めてしまった
— 今までは —

神様お願いです
どうか どうか

やっと届いたこの温かみを私から奪わないで

この腕が指が手がなければもう眠れない私

暗闇に目覚めても
ほら怖くない

隣の手
温かな 確かな呼吸^{ねいき}—これからは—

あなたが見る夢が
どうかキレイなものでありますように
あなたの行く明日が

どうか光りあふれる時間でありますように
そしてこの手が私の隣にありますように—永遠に—

『 無題 』

—あなたに出逢えただけで私が生まれてきたことは
無意味じゃなかったと思える
—あなたを愛せただけで
私が生きてきたことは
無駄ではなかったと思える

『茜』

どこまでも切ない茜色
三人で見ていた
彼も彼も私も 想うひとは違うひと

どこまでも続く茜色
もうすぐ星空
今夜は花火だけど
もう帰らなくちゃね

君の想うひとも
今頃君を想ってるかな
そうだといいね

私とあのひとも
君や君と同じように
何も言わなくても
分かりあえたならよかったのに

友達のままならあるいは…

どこまでも優しい茜色
三人で見るのは最期
でもずっと友達は約束
君たちとまでわからなくなりたくないから

今夜は花火

『後ろ姿』

そして あなたが振り返った時
どうして私が 涙を見せられるのでしょうか
しっかりと眼を閉じるよ

あなたに 泣き顔は見せない

これを別れというなら

せめてそれを認めさせないで

あなたの背中など覚えていたくない

笑顔だけ映して

私の瞳に映った横顔だけ

なのにあなたは

とても辛そうな眼で私を見る

それでも行く事を決めてるだから私の涙を見えないふりして
手を振る指先だけ見とどけ

後ろ姿だけが やたら印象深くて

何年経った頃になっても

あの時 涙をあなたにもつとぶつけてたら

運命は違ったのでしょうか

“ 道標その1 ”

『 帰り道 』

制服のポケットに手をつっこんで
背中を丸めて歩く姿が
とても小さく見えます

何度も何度も夢をみました1度でいいから
並んで歩いてみたくて

そのポケットに
私の手もつっこんでみたくて

あなたはいつも
優しくしてくれたけど
あなたはとても
恥ずかしがりやで

言えなかったの
「並んで歩きたい」
あなたを1番理解ってる
私でいたかったから

あなたの踏んだ落ち葉を

私も踏んだ帰り道

『萼草』

毎日通る路地

今年も紅く染まつた萼草

去年はとなりにあなたがいて
一緒に眺めてくれたけど

うろこ雲 朝焼け 夕暮れ
秋のたより

朝 眼が覚めると手が寒い
あなたがいない
あなたがいない

早く帰ってきて
ひとりは淋しい

『糧』

誰かの為の人生などありはしない
誰かに捧げる一生などありえない
すべて自己満足と言いつにすぎない
でも それが生きる糧になる

失敗してもいい
言葉など要らない
急ぐことはない
あなたの人生だからね

私はただ その備品でいたいだけ

今 思えば

私の人生にとって

あなたに出逢えた事は奇跡

そしてふたりで生きることを決めたことは

偶然と奇跡の果て

でも だからこそ 大切

完全な人生などありはしない

一度は他人に憎まれて^{だれか}いる

一度は自分を嫌いになっている

でも また歩き出している自分を見つけた時

それが 生きる 糧となる

“ 恋心その4 ”

『 またね 』

あなたの車を降りる時
ほんの一瞬
切なくなります

このまま二度と
逢えないような気がします

あなたの笑顔は
私の不安に気付かない
… 気付かないフリ？

でも

「 またね 」

って

言ってくれたから

「 次 」

がふたりの間にあると思っていいですか

それなら渋谷の駅犬よりもおとなしく
信じて待てます

だからその一言を

「約束」

なんだと

おぼえていてください

『観覧車』

このゴンドラが

いちばん天辺までいったらキスしようか

『朝の月』

朝空に浮かぶ月は

どこか忘れ去られた古い置物のような

置き去りにされた心のような

面持ちがする

碧い空に不釣り合いで

本人もなるべくめだたないようにひっそりと佇んでいる

私と同じね
場違いな恋をしたの
本当は
もっと上手くいくはずだったのに

あなた以外のひとを
好きになつてたら

『腕まくら』

何も見えない
何も聞こえない
あなたと私の吐息だけ

温かな海
揺れる浜辺
どこまでも遠くの果てまで
私をつれて行って

腕まくらから見上げる
あなたの横顔が好き

このまま深い眠りに逝く

私をつれていって

『初対面』

何度か会ってたし
話もしたけど

今夜あなたをみた瞬間

まるで初めて会ったような気がした

それはあなたから
思いがけなく出た

「君が好きだ」

という言葉のせいかな

それとも

この 星空のせいかな

“ 恋心その4 ” (後書き)

偶然だとしても、必然だとしても、私の言葉に耳を傾けていただいたすべての方の倖せを祈ります。読んでいただいて本当にありがとうございました。

樹歩

“道標その2”

『満天星』

この星空は
あなたの空まで続いてる

あの満天の星空の下
凍てついたアスファルトの道路^{みち}を
ふたり 歩いたね

あの頃はいつか来る別れなんて
予感することさえ忘れていた

今 こうして

ひとりで空を見上げてるとすべてが嘘のような気がして

あなたと出会えて
過ごせた季節を
今さらのように数えた

うたかたのように
浮かんでは消えて

だけど 信じてるよ
この先ずっと会えなくても
もう二度と声さえ聞けなくても
ふたりの心はひとつだと

この星空のように
どこまでいっても
ふたりの心はひとつのままにいる

つないだ手のあたたかささえ 忘れないように

『春の雨』

いつまでも いつまでたっても
同じところを
行ったりきたりしている自分が
また小さく見えます

全てをあずけたつもりでいても
心のどこかでくらべているみたい

二人の未来あきこが
気掛かりです
こんなに好きでいるのに

こうして窓を曇らせる雨を見ていると

もう一度昔に戻るような気がして

あなたに言えない思い出の中に いつのまにか
立っている事もあります

あの春の雨の夜を 私は
永遠に忘れられないでしょう

あの夏の匂いの日々をどうしても
消すことはできません

そしてその日々たちが
あなたと過ごした時よりも倅せで愛しかった事が
今は少し 悲しいです

『ふたり』

多分 ふたりには
ふたりだけの
空間があるのよね

わからなかった事を
気付くようになった

ほかの人がはいると
居心地が悪いみたい

素直になりたいのは
あなたに対してだけ

お願い

泣いてる時は泣かしておいて

あなたを責めたりしない

でも 涙だけでしか

表せない感情もあるのよ
きもち

あなたが無口でいたい時はただ黙ってそばにいるよ

言葉などかわさなくても

寄り添えあえれば

ふたりは解りあえるはず

そんな都合のいいことを

あなたの寝顔見ながら

考えてる私

“道標その2”（後書き）

偶然だとしても、必然だとしても、私の詩を読んでいたいたすべ
てのかたの倖せを祈ります。本当にありがとうございました 樹
歩

“ 恋心その5 ”

『 冬が近い 』

こうして

あなたとの思い出が増えていくたび
小さく胸が締め付けられます

こうして

あなたの腕に指をからませ頬をよせるたび
小さく不安にかられます

始まりには必ず終わりがあるから

あなたとは 一生涯

共に歩くと決めたのに

そんな誓いに甘えては
足元をすくわれるよね

見上げるあなたの横顔は

いつも遠くを見ていて
時々 私は
愛されてる事を疑います

どうかこの予感が
ただの胸騒ぎでありますように

『明日』

明日 明日またひとつ
いいこと

日々 小石を積み重なるように
いいことだけを数えたい

苦しい中に 小さな灯^{あかり}
どんなにささやかでも
信じたい
信じたい

明日 また空が碧いように
明日 恵みの雨が降るように

明日 あなたに巡り逢えるように

『弱い心』

もつと

気の利いた言葉が
出てくればいいのに

伝えたい事は
溢れるほどあるのに

本当の事を
口に出すのが怖くて

あなたを失いたくない
でも

「ずっと一緒」
とは言えない……聞けない

ふたり 別れない？
絶対 別れない？

…そう言うのが やつと

『自惚れ』

あなたは恋人
そう思うだけで
私の胸に灯が燈る

あなたが恋人
その夜から
私の中に蛍が踊ってる

昨日とちがう朝空
今頃あなたも
私を思ってくれてると
……自惚れてもいい？

ずっと遠くから見てたの
近くにいても
気付いてくれなければ
世界の果てだった

でも 今はこんなに近い
離れてても
あなたに私を伝えたい
ふたりは恋人

あなたは私の恋人

私はあなたの恋しい人

……初めての自惚れに酔う

“恋心その5”（後書き）

恋心も5つめの投稿です。1度に沢山載せられないのが残念ですが
…。私のつたない言葉に耳を傾けて下さった事に感謝。あなたに幸
多からん事を祈って。

樹歩

“ 星屑その1 ”

『 深い森 』

“ あなたの存在に
他のすべては越えない ”

はつきりと確かめた恋心はなんて切なく哀しく
やさしいのでしょうか

本当は 今でも
あなたが私を好きでいてくれることに
慣れないままです

でも 私はあなたを好きで
それは 大きな
孤独の波となつて
私をのみこみ
泡だけにしてしまいます

この 深い恋は
行方のないまま
どこまでいくのでしょうか

ひたすら ただよう事など
出来ない事を
私は知っています

それでも
離れることができない…
自分を

こんなに馬鹿だと知らなかった

これが 恋

ひどくて 辛くて 深くて
森の中にいるような恋

『繰り返す鼓膜』

私にとって

あなたという人は

何かをしてくれるあなたでなくて

そういう形容詞じやうごの要らないあなたでした

でもたくさんの
あたたかなものを
あなたから
もらった気がします
今でも 胸の中で

小さな光を放しています

一生の間の 一部分を

同じ場所で過ごせた事を

倖せに感じました

” 思い出 ” としか呼べなくなっても

” 記憶 ” の底に埋もれてしまっても

淋しくなった時

いつでもあなたの声を

鼓膜に繰り返していました

それでも想いは

色褪せませんでした

やはりあなたへの

恋が続いていたのでしょうか

『 みなも
水面
』

あなたが私を

忘れてないと知った時の

揺るぎない幸福感

流れてゆく雲のように

私はあなたの中で

ぬくもりという空を
浮かぼう

きつとこれを運命だと
認められる
決められたものには逆らわない
このまま抱かれていたい

受話器からの声だけで
胸がふるえる
その一言だけで
私を立ちつかせた

だから もう
小石を投げ込まれた水面みなものように
すべてを受け止め流されよう

“道標その3”

『再会』

快樂の海に身を沈め
あなたの腕の中を泳ぐ
誰よりも愛おしいひと
やっと逢えたしあわせの夜

ホワイトクリスマス
今夜は時計を気にしない約束なのに
やっぱり切なくて
窓からの雪あかりは
やがて来る朝をなくさめる

今度 いつ逢えるの？
今度 いつ抱きしめてくれるの？

また ふたり
長い長い一人の夜を越えて

夢の中でさえ
逢えたら嬉しくて
でもつらすぎる現実に
堪える心が今は欲しい

『桜の下』

きみよ

春が来たらあの色の下

ただ 立ちすくみ

風をうけなよ

きつと なぐさめられる

その孤独

その木の下には

必ずあるはずの白い灰

生きとしいけるもの全ての体液まで吸い上げ

夕焼けのまどろみを

思わせるその花の色は

やがてきみを

安らぎへと導く

両手を広げ

あの日差しにとけて

きみは

小さな葉の一部となる

鎖から放され

憎しみも忘れ去り

全てを葬り 眠りにつく

だからあの色は
ひとを狂わせるのに
なぜ哀しみにきづかない
きみよ
春を苦しがつた頃も遠く
その涙は宙を舞う
塵のごとくさ

“せめて一度だけでも
泣き叫ぶことを許されてたら
こんな風に心を閉ざさずにいたかも
しれない”
あの色の下
あるはずのところへ還る

『ごめんね』

あの約束を
果たせそうにない

あの海まで
戻れそうにない

寒くて
とても寒くて

なのにまだ

あたたかさを待ってる

もう 歩くの疲れたのに

…ごめんね

あなたの言葉

信じられない

あなたの言葉

守れない

こんな私で ごめんね

“道標その4”

『夢い願い』

いつも冗談ばかり言ってたけれど
いつもごまかしてばかりだったけれど

いつまでもこの時間が
続けばいいと願っていたの
このまま時間が
本当に止まるなら

あなたと今のままの
距離でいいから
そばにいられるなら
それでいいから

いつもそう思ってたなんてあなたが気付く筈もない
いつも冗談ばかり言ってたから

失うことだけが
こわかったから

『切符』

切符をにぎりしめ

まだ電車も来ていないのに急いで階段上っていく
一歩ずつあなたに近付いていく

流れていく景色が

とてもゆっくり感じた

早く 早く

私をはこんで

白一面の中

待つてるあのひとのもとへ一瞬でも早く

恋焦がれたあのひとのもとへ

指折り数えた夜

外は雪

曇り硝子は吐息のせい

「何もいらない」

あと一枚残る切符

手に取りたくない切符

私からあなたを

遠ざけるもの

でも本当はあなたの方が
寂しいはずだったね

ごめんね

『サービスエリア』

眼を疑った

見間違えるはずがない

……あのひと

こんな所で

懐かしい彼を

隣には知らない女性^{ひと}

…彼女とは^{あのこ}

別れたのね

あんなにつらい別れを

私に強いたのに

今隣には知らない女性^{ひと}

そして私の隣にも

あの人の知らないあなた

あの人を知らないあなた

手をつなぐ

それならば

あなたももう

「知らない人」

すれ違っても振り返らないサービスエリア

“ 恋心その1 ”

『海辺』

「石が減らない」

あなたが言った

ふたりで海辺

ひたすら小石を波間に投げて

なるべくあなたの後ろを歩かないようにした

後ろ姿を見ると苦しかったから

あの頃の想いがこみあげてきて

あなたの歩幅が私をなくさめた

それより広くても狭くても多分私はあなたを愛さなかった

何気ない言葉も私を射した優しいささやきさえ私を泣かした
その存在が胸を焦がした

どうしても

どうしても

どうしても

あなたを愛してる

『記憶を花束』

こうしてこの窓から一点の灯を見つめっていると
たくさんのさまざまな想いが
浮き沈みうたかたにめぐってくる

…わたしは これからどうなっていくんだろう
愛しいひとの腕の中で
いつまで 眠り続けていられるだろう

やさしさを縛れない
心と同じように

あふれるばかりの記憶のすべてを 花束にできるなら

あの深い雪景色の中で

いつまでも立ちすくんでいたように

今のわたしは

あなたへの想いを抱くばかりで

ひとりでもあのひとを意識せずにはいられないのです

『戯れ』

木もれ陽に透ける赤い髪が涼風に揺れるのを
私は飽きずに眺めていました

いつかあなたの視線が
私の方へ移ってきたことも覚えています

教室の隅で

一緒に歩いたあの坂道

夏祭りやびしょぬれになったバスの中

夕焼けを背にうけてふたり乗りの自転車

なんだかいつも笑っていたみたい

幼くて たやすく 本心に戯れるように

あなたの顔を見上げると

真っ白い歯がいつもほほえんでいて

それだけで 私は守られていたのだと今はわかります

こうして大人になった今でも

友だちでいてくれるあなたに

心から

「ありがとう」

と言わせてください

“ 恋心その2 ”

『 前夜 』

あなたに逢える前夜は
ただ ひたすら
綺麗になることだけ祈る

明日 あなたが
「 そんなにいい女だったっけ 」
と思うように

いつまでも
さなぎでいたくないわ

『 ひどい恋 』

もう二度と
こんな恋はできない

あなたがそこにいるだけで鼓動が痛くて
何度も瞬きしてしまう

あなたを

必要とさえできない

そばにすぎたら

窒息してしまう

ひどい恋

どうしてこんなに

波にさらわれるの？

感情（流れ）に抗えないの？

その視線が一瞬でも

わたしにそそがれたら

私は自分の醜さに

ぶつけられない赦しをこう

もう二度と

こんな恋をしたくないなら

この茨から放たれるすべを探さなければならぬね
いっそ

私の前から消えてしまつて

『執着』

ただ見つめていられるだけでよかった

よかったはずだった

あの人の横顔

吊り革を握る長い指

まっすぐな目線

名前など知らなくてもよかった
よかったはずだった

なのに

となりにあの娘^こがきてしまった
きてしまったから

どうして

どうして

そこにいるのが私じゃないの？

ささやかなキレイな恋が

鉛色に滲んでいく

とめられない

彼女がじゃま

あなたが好きな人を私が憎むなんて

「見つめるだけでよかった」

なんて嘘

愛してほしい

私を愛してほしい

気がつくのが

遅すぎた

ただの 臆病者だっただけ

『河』

向こう岸待っていてくれるのが
絶対にあなたなら

どんな深い河でも
渡ってしまいそうよ
流されるだけと
わかっていても

“ 星屑その2 ”

『琥珀の絨毯』

あなたと歩く寒い朝
つないだ手と手
ポケットの中

冬だからこそ
ささやかな暖かさが
なお頬を緩ませる

見上げるとその横顔が
私を庇っているよ
だからもう少しだけ
身を寄せさせてね

見渡すかぎり銀杏並木
金色の絨毯
私達はまるで

映画の中の恋人のよう

この落ち葉のひとつひとつに
二人の思い出映しましように歩いて来た道
これからの未知の道

敷き詰めた金色が
すべて

琥珀色にかわっても

二人ポケットの中で

手をつなぐことを

夢で終わらないように夢見て

『遠い空』

あなたに逢えない日は

あなたがこの世界に

存在いることを喜ぶ

あなたに逢えた日は

私がこの世界に

来訪きたことを慈しむ

独り 車から眺める雲

鳥が 群れして行く遠い空

どうかこの祈りが

あの夕焼けに届くように

あなたの行く道に

沢山の幸運が待つように

あなたに逢えなくても

私は独りじゃない

思い出を数えながら
鳥を見送る遠い空

『真夜中の鏡』

鏡に映った私

私の後ろにあなたの背中
私は虚ろな顔

真夜中の景色は

時間さえ動かない
あなたは指先で私を探し
白い海でさまよい歩く

…このまま

あなたとどこまでも
恋の果てを沈み堕ちて
消えていけたなら

その腕もその唇も

その温かな温もりも

私だけのものになるのに

…それはまぼろし

鏡の中の私が

ほんとう
真実の私かなんて

誰にもわからないよね

同じように

二人が同じ深さで愛し合ってるかなんて
誰にもわからない

鏡の中のあなたに

問いかけたら

欲しい返事がくるかしら

“ 刹那その1 ”

『 刹那の隙間 』

ずっと逢わなかった
偶然さえ憎んだ
存在をも忘れたかった
あなただけは…

毎日思い出しても
色褪せなかった想い
消せない恋慕
顔を見なくても
声を聞かなくても
鮮明なあなたの歩く姿

努力という言葉じゃ
足りないくらいあなたを
私の胸の奥に奥に奥に
葬ろうとしてたわ

7年ぶりに見る
真正面からのあなた
その手に触れたくて
でも一瞬でも
あなたの温度を知ったら
…泣き出してしまうよ

これまで積み上げてきた

あきらめの積木

2度と恋はしないと誓ったはず

もしかしたら

「あなた以外には」

恋はしない事だったの？

…認めたくない

この無抵抗な感情を

あなたが私を引き寄せる

…引き寄せた瞬間
時間^{とき}がとまった

もう戻れない

抱きしめられて

呼吸^{いき}もとまった

どんなにくつついていてもまだ距離があるみたい
刹那の空気も通れないほど私を抱きしめて

気が遠くなって

あんなに辛かった夜さえ

この瞬間の為だったなんてこじつけをしてる

もう嘘はつけない

騙し切れなかった心

この手を欲しかったの

その胸で泣きたかったの

いつまで

こうしていられるか

わからないね
でも今だけは

あなたの匂いを
頬に指に髪に唇に
染み込ませてください
いつかあなたを見送る時
淋しくないように

わたしが人生を
顧みた時

あなたと私の間に
刹那の隙間もなかった瞬間があったと
確かにあったと

…信じられるように

この先一生
あなたに逢えなくても
この最期の恋を
抱き続けて歩いていくよ

どんなに苦しくても
あなたに出逢えたことを
祈りながら歩いていくよ

どうか
永遠の果てまで
刹那の隙間を
この恋慕で埋め続けて

“刹那その1”（後書き）

樹歩です。この“刹那”はかなり長い詩になってます。メッセージ性の強いものにしたかったのであるべく抽象的な表現を避けました。

この場をお借りして、いつも私の作品を読んで下さってる皆さんに御礼申し上げますm（――）mよかったらメッセージも送ってください。出来る限り誠実に返事をお返ししたいと思います。ありがとうございます。

“ 冬情景その1 ”

『クリスマス記憚』

いつも今頃になると
楽しかったクリスマス
を
思い出す

みんなでパーティ
歌を歌い、お酒を飲んで
朝までおしゃべり

外は雪
アイスクリーム埋めたのがわからなくて
みんなで探した

あの頃
未来はすべて当たり前
の輝ける“ 予定 ”だった
この友情と同じくらい
信じられる“ 成功 ”だった
友よ

今は誰もそこにはいない
それでも
あの頃を愛しく思う時
きみがいなければ
何も語れない

寒い凍てついた夜さえも
みんなで散歩した
この恋もその夢も
終わらない物語
… きみとの繋がりと似てる
クリスマスツリーには
たくさん笑顔の星
ケーキもお菓子も仲良く分けて
昨日の悲しみついでにわけちゃえ

友よ

今もきみはそこにいて
私に変わらぬ優しさ紡ぐ
言葉がなくてもわかりあえる奇跡
それはみんなで作り上げた軌跡

もうあんなに
楽しいクリスマスは
こないかも
… 大人になる悲劇だね
でもきみへの思いは
どんなに時が流れても
昨日のように語れるよ
ほんとだよ

街で振り返る学生服
あの頃の君と君と君と……ひとり佇むクリスマス

『クリスマス記憚』

いつまでも君を
信じられる

いつまでも君の前途に
幸運が散らばっているよう…今夜も祈る

数え切れないほど
君がくれた優しさを
何に感謝しよう

私には神様より
君を必要なのに
私には神様より
君の方が
見守ってくれてるの
知ってるよ

“道標その5”

『武器』

どうしていつも

強い女と思われるんだろ？

どうしていつも

泣かない人だと思われるのかな？

だってどんなに苦しくても耐えなければならぬなら
だってどんなに悲しくても望みが叶わないなら

世の中上手いかないより上手くいく方が

珍しいんだよ

それに気付けば

上手くいった時に

喜びも大きいんだよね

…なんて言い訳かな

どんなに手を伸ばしても

届かない憧れ

ひとり部屋の隅で

膝をかかえる

強くない

本当は泣き虫

でもそれを武器にしたくないの

“女”じゃなくて

“人”として歩きたいから

なんにもない私を

なにかある私に変えていくよ

そのひたむきに歩く勇気を武器にしたい

『朝焼け』

寒い朝

もう少し眠りたい

隣で眠るあなた

夜はあんなに長いのに
目覚めたらあつけない

カーテンを開けると

遠くの空　輝く朝焼け

それなら今夜は雨

あなたと私も

雨に濡れるのを避けられない

昨日のあなたは

どこか私の知らない人の様

何か言いたいんでしょう

私を泣かしたいんでしょう

二人の先は雨模様
今はつかの間の休息
きつと次はひとりで
朝焼けを迎えるのね

『朝焼けその後』

今さら手紙をもらっても
困る
夜中に電話をされても
困る

だつてやつと慣れたのに
一人の夜 一人の道
… 一人の朝

あなただけが
寂しかった訳じゃないわ
あなたが
誰かと寝ていた時
私は自分を抱きしめてたわ

ずるい人
私はもう要らないの
あんなに好きになる人は
要らない

あなたが見てる私は幻よ

すべて許すほど
心広くなれない

私が見慣れた朝焼けを
あなたも見慣れてください

“ 星屑その3 ”

『道の途中で』

君を途中まで送った
家まで行ったら

今度は君が
僕を送ると言い出すから

また明日も会えるよ
僕達はずっと一緒だよ
何度そう言っても

「そうかなあ」
と俯いた

夢の中でも
君を抱きしめたよ
夢の中でも
夢心地な君の肌

こんな風に本当は
道の途中で別れたくない
君がこのまま
いなくなったらどうしよう

不安なのはお互い同じ
愛は不安定が当たり前
君のせいじゃない

僕のせいじゃないように

だから明日こそ

君を家まで送らせて

そしていつか

「ふたりの家に帰ろう」

そう言わせて

必ず言うから

僕からきくと

『要らない脚』

何故海は深いのか

何故空は広いのか

何故海は空は碧いのか

そんなのはどうでもいい

この森を奥まで

迷い続けるくらい奥まで

空を仰ぎ叫んでも

誰の耳にも届かない奥まで

私を招くのは

思念だけの面影

少しずつ私を飲み込み

やがて前後不覚にする

空を忘れ海を置き去りに

交わることなく
私は空に浮かぶ
私は海に沈む

歩く脚は血にまみれ
くぼんだ瞳は光を見ない
さまよいさまよい
もはやさまよっている事も忘れる
すべて朽ち果てる

かすかにあなたの
遠い笑顔だけ浮かぶ
手が届く事のなかった
愛おしいひと
今行くからね
すぐ行くからね

もはや用のない脚を
一歩一歩行く
この暗い森の奥にある
私の寢床

やっと行きつけるのだ
私の空
私の海
もうこの脚も棄てよう
私でさえなくなるのだから

“ 2007 遙か ” (前書き)

新しい年に寄せて番外編です。樹歩

“ 2007 遙か ”

『 遙かな道 あした 』

小さい小さい自分に

あなたはきつと

大きな大きな灯をくれた
ともしび

歩いていると

立ち止まるのが怖くなる

振り返るのがつらくなる

大人になつてる気がしないのに

弱音を言うのに勇気がある後ろめたい気持ちになる

…だれにたいして？

すれ違う学生たちを

懐かしさで見つめてしまふあの頃だって

痛いことたくさんあった

毎日痛い心で

電車に乗った

だんだん心許す人が

狭くなってくるのは

誰でもない

自分自身が招いたもの

でも本当は

人生重ねることに

心開ける人を

必要になつてゆく

自分の弱さ

認めざるを得ない

…あなたがそばに

こんなにそばに

私を導いてくれるのが

こんなに素直な涙

まだ流せたんだね

明日からも歩いていくよ

瞳めの前の遙かな道を

終わりのない道だけど

通過点も見えないけれど

私もあなたのように

誰かの大切な

誰かになりたい

誰かの弱さに寄り添いたい

…そうきつと

友達が

家族が

恋人が

景色が

時間が

暗い夜が

切ない朝が

蒼い空が

白い雲が

広い海が

明るい波間が

光る地平線が

眩しい水平線が

瞬く星が

凍てつく月が

思い出が

涙が

笑顔が

…あなたが

そうしてくれたように

遥かな果てのない道を

歩いていくよ

いつか出会う誰かの為

既に出会ってる誰かの為

この気持ちを愛だと

気付かせてくれた

あなたの為

弱さでさえ

明日への支えにしよう

涙さえ

自分の味方にしようよ

大人と呼ばれるようになっても
見えない明日が怖いのは

当たり前だよな

そのぶん

明るい日と書くのが明日

一人になつて

歩いていくよ

初めから二人だと

孤独がなお身に染みるから

見えない果てない

遥かな道を

“ 2007 遙か ” (後書き)

A H A P P Y N E W Y E A R ! 今年もあなたにとって幸運た
くさん降る1年になりますように。 樹歩

“ 刹那その2 ”

『 泣けない涙 』

シャッターを閉じた

多分何年も

閉めたままの店の軒先

置きざりのぬいぐるみ

古びた人形

忘れ去られたおもちゃ

… 何故でしょう

泣いてる様に見えました
表情のない目が

なお悲しげに映りました

… 泣いているのです

寒くて寂しくて

すべてに忘れられてる事が

… 泣けないのです

誰にも

気付いてもらえないと
知っているから

どんな寒さより

どんな冷たさより

凍てつくのは心

…私も泣けないのです
出口の見えない痛み
もはや自分自身になった
病んだ心

救いのない暗闇を
ひとすじの光を探して
枯れた頬を確かめる

表情のない目は
あの忘れ去られた
おもちゃ達と同じ

どうしたら
この病んだ感情きもちを伝えられるのでしょうか
どうしたら

雪が積もるように
腐敗してゆく心を
温め溶かせられるのか

そのすべを探して
あなたの温もりに
たどり着いたはずなのに

…錯覚だったのかも
あなたなら
私のすべてを
わかって
理解できると

私だけが思い込んで
私だけが納得して

言葉にしなくても
理解^{わか}りあえるなんて
そんな困難を
あなたに押し付けて

どんなにたどたどしい言葉でも
口から出るありのままを
紡いでいけばよかった
そしたら
こんなに寒くならなかったかも
その手に間に合えたかも

こうしてあなたが
隣にいてくれても
彼方のように
遠く感じるのは
苦しさを語れない私の
病んだ心のせい

流すことさえ忘れた涙
行き場をなくし
軀をめぐる

永遠に
あなたという
憧れに焦がれて

“ 冬情景その2 ”

『 半月の祈り 』

夜なのに空が高い
星の瞬きが

凍てつく心をよけいに刺す

月は何もかも見透しながら何もかも語らない
…… 何も映さない

あなたをひたすら想う

どうかあなただけは

寒い思いをしないように

月よ星よ風よ

あの人からだけは

体温をうばわないで

私がそのぶん凍えるから

身体を丸め縮こまるから

心も萎ませ縮こまるから

それでも私は

温かみを知っている

あの晩あなたに抱かれた時冬ゆえに

温かみがすべてに滲みた

半月の夜

愛しいあなたを

抱いて抱いて抱いて

寒くないわ

本当の寒さは心の貧しさ

私には

あなたを恋する想いがある

愛しているわ

あなたの空に

明日も太陽がいるのを

どこまでも信じる

今夜の月のやさしさに

私の中の氷が溶ける

…ひとり夢の中で

抱いて抱いて抱かれて

『ブランコ』

誰もいない公園

ブランコに乗った

揺れる 揺れる

このままどこまでも

遠くへ

あなたへの

想いだけでも

この空へ飛ばそう

揺れて 揺れて
このまま飛び降りて
運よく死ねたら
あなたは

私を笑うかしら
ブランコから
鳥になろうとした私を

子供っぽいみじめな私を

『肌の毛布』

ベッドの中
先に眠ったあなた
私はそつとその指を
私の頬に重ねる

…あたたかい
重ねた毛布より
あなたのぬくもりの方が

…生きているのね
あなたも私も
重ねた手の中には
情熱と同じ深紅が流れる

そして朝になったら

もうひとり

家族が増えると伝えよう

“道標その6”

『星の距離』

あなたを考えながら
流れ行く日々

あなたと過ごした時間を
飽きずに数える

あなたの笑顔を
胸のなか抱きしめ

…一緒に暮らす事だけが
愛じゃないと

…離れていても
共に人生を歩めると
言ってくれたひと

他のひとなら
信じてない言葉でも
あなたの言葉だから
素直になれるんだよ

それをわかってほしい
あなただからだと
信じてほしい

『砂漠で』

ちよつとだけでいいから
ほんの

ちよつとだけでいいから

その腕に

つかまらせて

だつてずっと

砂漠にいたのよ

ちよつとだけでいいから

ほんの

一滴の潤いでいい

だつてずっと

砂漠にいるのよ

『足元』

ひとの心は

あてにならない

わかつている

自分の心さえ

持て余しているのに

あなたに答を
求めるなんて
お門違いもいいところ

やさしさなのか
自己満足なのか
同情なのか
憐れみなのか

……すべて勘違いなのか

自分の足元を
見るのが怖い
いつから

まだ起きてもいない明日にこんなに
不安を覚えてしまったのか

曖昧は居心地がよすぎる
なのに人は
都合のいい答を
あらかじめ欲しがる

あてにならないと
知ってた
あなたの心も
私の心も

……でもね
曖昧なままでも
少しでもつながりが
見えるなら

あなたの足元を
確かめながら
私の足も地につかそう
あてにならないことも
二人の一步だと

“ 星屑その4 ”

『 捕われ 』

どこにいても

何をしていても

あなたがいる

あなたを意識してしまう

そういう自分を

可愛いと思うには

もはや似合わない私

もう誰かに

振り回されたくない

自分の判断を^{みきわめ}

信じる自分になりたい

あなたの声が聞こえる

遠い耳鳴りのよう

お願いよ

不在で私を虐めないで

あなたの声が聞こえなかった

鼓動が雷鳴のよう

捕われて

どうしたらこの恋から

解放されるのだろう

どこを見ても
どこをさがしても
答えは見つからない
自分が空回り

それが恋の醍醐味と
他人^{ひと}には言ってた
途方にくれて
想いの行き場を求め

あなたの声がききたい
あなたの私を呼ぶ声を
捕われて

こんな恋を歩く私を
いつか

思い出し笑いできたら

そして

そんな私を

私が可愛いと思えたら

『水面その2』

今まで

静という音さえなかった
この泉に

あなたが投げた言葉が

小石となり

水面をつくった

水面がおさまり

あたりに静寂が戻っても

泉の底の小石は

永遠に沈んだまま

いつか

溶けてしまえたらいいね
跡形もなく

『夜長の過ごし方』

夜中に飲むお茶は
独りの方がいい

夜長にすごすのは
自分と時間と月明かり

ひたすら
本当の^{じぶん}本心を探す

心許なく
たよりなくとも

脆い決心に鉛をかため
月見上げ

翼を広げ

目指すことも忘れ

遠くへ

遠くへ

遠くへ

ただひたすら

遠くへ

遠くへ

遠くへ

“ 冬情景その3 ”

『 望郷 』

冬の田園の光景は
心の奥 もろい部分を
震わせ 高ぶらせる

朝もやの白は
まぼろしを思わせる

私は幻影の中に
遠い昔を見る
友達との帰り道

帰りたい 帰りたい
一番素直だった頃に
戻りたい 戻りたい
あの頃の笑顔に会いたい

凍てつく霜は今でも
あの音を奏でるだろうか

かの友達は今でも
あの優しさを
持ち合わせているだろうか

届くなら 届くなら

今でも友情は
変わらないと

いつまでも いつまでも
この世の果てまで
変わることはない

伝えたい 伝えたい
：言葉にしなくても
わかりあえた想い

ひとり遠い土地

向かうべき

人生の途中で

あの頃の私たちに遭った

『秘密』

あの頃自慢だったのは
きみのその顔を
私だけ知ってること

あの頃自慢だったのは
きみとした話が
ふたりだけの
秘密だったこと

：大好きだったんだ

きみのこと

だから友達でもよかった

きみが他の子と

歩いていても嬉しかった

幸せそうな笑顔だけで

満たされた

… 胸が痛かったけど

喜びの方がそれを越えてた

私たちの秘密は

永遠に

私たちだけのものだよね

あまりに秘密すぎて

誰も知らなすぎて

もはや自慢じゃないね

… きみはまだ

憶えていてくれるかな

もちろん

忘れていても責めないよ

… 友達だからね

きつとこの先も

… 2度と会えなくても

君との秘密は

私の誇りだから

“ 道標その7 ”

『 絶対値 』

あなたに逢える日の朝は
目覚めた途端
私の全細胞が
あなたを求める

あなたに逢える時間が
時計の針が動く度近づく
私の全細胞が騒ぎ出す

沈黙さえ五月蠅い
鼓動がざわめく
もうすぐ
もうすぐ
あなたが目の前に

きっと私は
あなたと逢えなくても
それなりに
歩いていけるけど

きっと私は
あなたを失うなら
歩いているだけで

そこに意味を見出だせない

どれくらい

あなたに焦がれて

どれくらい

あなたを絶対値か

私の全細胞が知らせる

私からあなたを

葬ることはできない

この心^{おもい}が

どうか執着じゃないように

もうすぐ

もうすぐ

あなたが私の前に

『冬の人生^{みち}』

あなたと手をつなぎ

寒い街を歩く

私の手はいつも

あなたの中にいる

その手の感触に

あまりにも慣れた私
でもね

爪の形も
指の長さも
掌の大きさも
きちんと答えることは
できないわ

… 心が見えないように
… 言葉だけでは伝わらないように

つないでいない方の手は
路頭に迷い
空をさまよう
でもね

その横顔は
その話し方は
その歩き方は
… この肩の擦れ合いは
確かに存在あるもの

絆つながりを
深めてゆくように
愛情おもいを
紡いでゆくように

寒い歩道さえ
私に気づかせる

冬のような人生^{みち}
あなたに導かれて

ふたりいつか

この手のぬくもりのような春の人生^{みち}をゆく

“ 星屑その5 ”

『 追憶 』

またあんなふうに
笑えたらいいと思う

またあんなふうに
みんなで騒げたら

でもそれは無理

あの頃だからこそ

楽しかったんだ

後先ない日々を

ただきみと過ごした

何にも縛られていなかったから
きみのことだけ考えられたんだ

何も決めていなかったからきみのことだけ見ていられたんだね

…あの頃気付かなかったけれど

『 切望 』

小さな路地

傷だらけの犬が

おじいさんに連れられて
歩いていきました

一歩出る足も

つらそうなのに

それでも外へ

行きたがるのだそうです

懸命に

足を運ぶその姿は

“勇姿” 以外には

呼ぶすべがありません

…私は

あきらめばかり

身につけているんじゃないかな

…私も

もしかして もう少し

遠くまで 行けるかも

…行けるかも

『代わりはいない』

ときどき

本当にときどきだけど

あなたが

私の前から消えたら

いなくなってしまうたら

…と考える

人間はしょせん

独りなのだと

かたくなに

信じてきたけれど

もしかしたらそれは

いいきかせていただけかもしれない

誰にも大切なものは

あるはずで

でも私には

あてはまりたくなかった

孤独を知るのは

守るべきものを

失ったあとだから

あなたを大切

あなたが寒さに凍えたら

私は毛布になろう

…あなたは

もつと温かいもの

私に与えてくれたから

この愛しさより

かけがえのないもの

あなたの代わりはいないよ

どこにも代わりはいないよ

“ 2007 別離 ” (前書き)

今私の前に、もうすぐ旅立つ父親がいます。私は父親との確執を埋められそうにないのですが、せめて静かに見送りたく、日々過ごしています。

“ 2007 別離 ”

『 愛を乞う 』

その瞳^めは何処へ
何を求めて

いつかあなたは
深い彼方へ

この手を離れてゆく
私が

その手を拒んだように

あなたはとうとう
最期まで与えてくれずに
河を渡る

… 許しを乞う
あなたを愛せなかった
見送る道は
流れて流れて

… 果たせなかった愛を
いつか会う世に
託しましょう

夢はうつつに

その両手から零れ落ちる
水の雫のように

互いに
相入れあえない運命さだめを
互いに
受け入れ認めましょう

それをただひとつの
契りの紐と
あなたは知らなくとも
私は持ち続ける

…果たせなかった心を
いつか交わす世に
こめましょう

…さよなら
最期まで愛を乞うひと

『三途に捧ぐ』

その人は
彼女に見守られている時
とても とても
幸せそうでした

その人は

彼に少し褒められただけでとても とても
嬉しそうでした

どんなに憎み合い
どんなに蔑んでも
二人はとうとう
ここまでできました

尊^{みち}い人生
永遠^{とわ}の別れ
もうすぐ

その手の流れは止まる
冷たく凍る

彼女の温かいまなざしが
どんなに彼を
そして私を
救っていたか

無償の優しさを注ぐ
妻として
母として
彼女はいつも今でも

遠い三途に歩き出す
彼は一秒ごと
どうかその先が
現世^{いま}より
穏やかでありますように

そして彼女を
いつまでも見守って
くれますように
どうか
ふたりで歩いたことを
悔いてませんように

“ 恋心その6 ”

『 撫でて 』

雨の夜 あなたと歩く
髪が濡れて

あなたは私に言った
「君は暖かいね」

まだ 慣れないの
あなたのそば
呼吸^{いき}が
かかるほどの距離

まだ 刻めない
その歩幅を
私の記憶の底
染み付かせたいのに

撫でて
私の髪を頬を心を
私のものにならなくていい
あなたのものにならせて

撫でて
ふたりのあいだにある
確かにある絆を
… 優しくね

雨の夜 ふたりで歩く
あなたの後ろ姿

肩が濡れて 私は言った
「私を暖めて」

『あてのない空』

今ふつと

何か思い出しそうだった

広い庭園

その人は両手を広げ

あてのない空

何かを受け止めようと

あてのない空

何かを手放そうと

どこへも行けない眼は
どこからともなく
見ることを拒んで
映るのをまかせてる

： 思い出せない
今も握りしめる手紙

きつと大切なこと
私がばらまいた

もう一度
この心によぎってほしい
あのあたたかみを

歩いては立ち止まり
影を確かめる

水のない河
存在価値を探し疲れ
天を仰ぐ

水のない河
澱んだ水に息づく光り
心のち
心にとどけ

思い出しそうな気がする
記憶の糸解して

この手の中に
降り注げ 希望の雨水
河に流れをもたらせ

あてのない空
握りしめた手紙には

あてのない空

途方にくれる恋慕

あてのない空

いつかたどり着く心は

あてのない空

あなたの必要な

存在になりたい

“手紙その1”（前書き）

この詩を親愛なるMに捧げます

“手紙その1”

『星空の記憶』

いつまでも
いつまでも
この身が尽きるまで

いつまでも
いつまでも
この呼吸^{いき}が
この鼓動^{おと}が
残影さえなくなるまで

あなたを想ってる
あなたを慕い続ける

遠い遠いあの頃
ふたりで歩いた夜
満天の星空
冷たいアスファルト

何年経っても
幾年重ねても
私たちは語る

「変わらないものがある」
「代わりにならないものがある」

この先その笑顔は
私のだけのものには
ならないだろう

私があの日

あなたから離れたことも

…もう…

いつまでも祈ろう
どうか倅せで

願いを紡ぎつつける
せめて私より
倅せで倅せで倅せで

ここから見送るね
モノクロームのあなたを

言わなくてもわかるよ
あなたの言いたいこと
ちゃんと聞こえる
じかに心に

あの頃のふたりが
とても愛しいね
どうしてあんなに
ひとつだったんだろうね

この先その両腕に

包まれることはないだろう

すべてを乗り越えられると信じていたことも
…もう…

離れたあとも

離れられなかった

この想いだけ

あなたに伝わるなら

あの頃のふたりが
とても愛しいね

いつまでも

いつまでも

いつまでも

いつまでも………

『デッキにて』

この今の

ふたりを隔てる距離が

これから先

縮まることのない距離

新幹線デッキには

あなたを見送る私だけ

手をのばせば
あなたは私を
引き寄せるだろうか

…ありがとう
大人になったあなたは
やさしさだけは
昔のままだった

だからこれ以上は
なにも要らないわ

…本当にありがとう

“恋心その7”（前書き）

詩集 想いを羅列をお読み下さる皆さんへ ずいぶん投稿が
久しぶりになってしまいました。プライベートで色々あり、なか
か書けなかったのですが、思い浮かんだ言葉を心に忠実に綴りまし
た。よろしければ感想やメッセージなど送って下さい。お待ちして
ます。ありがとうございました。

樹

歩

“ 恋心その7 ”

『 雨のなか 』

あなたに
抱かれていますと
まるで

全身を
静かな雨に
打たれているようで

私は
遠くで
鳥の鳴き声を聞く

地の果て
小さな
芽が出る音を聞く

あなたの
肌の温もりで
私は宙に浮かぶ

どこかで
波のさざめき
いのち
生命の流れ

ここは海

あなたとどこまでも
泳いでゆく

心を満たすひと

私もあなたの心満たす
雨つぶになりたい

『予感』

言葉も交わさず

ただ同じ時間を共有し
お互いの

息遣いだけ確かめ

ふたりで

いられさえすれば
あとは望まない

無口な私にも

あなたは微笑んでくれる
無口なあなたでも

私は優しさを感じる

どうか

ふたりが見つめる視線が

同じ方向を

確かめてますように

言葉にたよらなくても

温もりがうすれても

…いつか

終わってしまう運命でも

『透明な果実』

ふたりで

愛情という

真っ赤な果実を

かじろう

ふたりで

思い出という

透明な果実を

刻もう

『抱擁』

一瞬ね

夢を見たの

ずっとこのまま
時がとまって

あなたと
くっついたまま

一瞬ね
眩暈がしたの

その腕が
私の背中に

ずっとこのまま
独りになっても

一瞬しか
引き寄せなかった
その気持ち

痛くて
なにより痛くて

遠い記憶が
流れ星

この抱擁を
私は私に抱きしめる

一瞬ね
夢を見たの

幻ではなくて
夢を見たの

“ 手紙その2 ”

『浮遊感』

酒を煽り

煙草を呑み

あなたの

腕枕で眠る

明日の朝を

もはや存在をも忘れて

これ以上の

幸福は探せない

『桜忌憚』

あの子も

あの人も

あなたも

逝ってしまった

このうえなく

愛しいひとだったのに

『やさしさを数えて』

多分

今その口から出た
あなたの言葉は

私への

本心なのでしょうけど

呆気なく信じるほど
私は若くない

だけど

今その口から出た
あなたの言葉に

嘘はないってことは
水より真実ね
私はわかってる

何も

確かめる必要ない
今ここにある
優しさを数えて

『Dear...』

いろんな言葉が

浮かびます

たくさん 생각이가

浮かぶのに

どれもこれも

嘘くさくて

どんなに

キレイな話にしたくても

この胸の中は

明らかに泥臭い

もつと

言えばよかった

何度も

確かめればよかった

あなたに

愛されてたのかを

もう世界中捜しても

あなたに逢えない

抱きしめたくても

抱きしめて欲しくても

こんなにも

大切だったなんて

でもあなたに

教えてもらったよ

ひとは永遠に

ひとを許せるのだと

ひとを許すことこそ
自分を救うことだと

あなたから得たものを
大切にこの身に刻み

強く強く

生きていくからね

それでも

もつと

伝えればよかった

何度でも

伝えればよかった

あなたに褒められたいと
あなたに認められたいと

あなたを愛していると

“手紙その3”

『最期の抱擁』

あの時

本当の永遠を見た

2度と

届かないと思った

あなたの肌

あなたの匂い

ああ

あんなに幸せそう

あなたを見たのは

あの時が

初めてだったかも

昔もそんな表情かお

みせてくれたのかな

私だけが

愛を紡いだのではなかった

どうかどうか

あなたがこの先も

勇気ある道を
歩めるように

あなたにあげる
私の永遠を^{とわ}
最期の抱擁

言葉にならない想い
涙だけでは足りない
刻めない温もり

あの日々だけが
ふたりだけのもの

だから

あなたに捧げる
私の永遠を^{とわ}
最期の抱擁

どうかあなたに
勇気を与え続けるように

『親愛なるひとへ』

どうして
離れてしまったのか
どうして

耐え切れなかったのか

すべてを

幼さのせいにできたら
楽なのにな

お互いを

あんなに必要として

ひたむきに

手をつないでいたのに

なぜ

ほかのひとを愛しても

あなたの影を

人込みに探すのか

なぜ

ほかのひとを抱いていても私のはだを
胸に刻もうとするのか

ああ 忘れられない

多分ふたりで

土の中まで背負ってゆく

この先 命尽きるまで

ふたり逢えなくても

…親愛なるあなたと

同じ気持ちで生きてゆく

約束もいらない
言葉もいらない
温もりもいらない

あの日々だけを
連れていくの

いつか

輪廻した先で

あなたに出会うまで

果てしなく

親愛なるあなたへ

“道標その8”

『無垢の日々』

あんなふうに
誰かを一途に
愛せるなんて

真っ白に
真っ直ぐに

あれを倅せと呼ばずに
何を言えればいいのだろう

ただあなたが
存在するだけで満たされた

ただあなたの
倅せだけ考えてた
無垢の日々

『光り輝く』

多分だれもが
1度くらい

自分のすべてを
かなぐり捨てても

守りたいひとが
いるんじゃないの？

そして

その瞬間が
のちの人生みちの中で

もつとも

光り輝く時間だったと
気付くんじゃないかな

その時

あなたの目の前にいる人が

あの守りたい人だったなら

あなたの人生は
類い稀に

倖せに光り輝くものだよね

わかってる

世の中そんなに
あまくはないけど

『あの頃』

とりとめのない
やりとりが
今となれば
たからもの

『孤独な小径』

道なき未知に
また立ち止まる

何に迷っているのかさえ
何を見ているのかさえ
わからず

焦りだけ持て余す
延ばす手から
零れる思いの行方は

すくむ脚を
一歩進ませるために
零れる涙の行方は

まだ姿なき私に届け
今より大きな私に届け

孤独の小径は

迷路より始末が悪い
抜け道もなく
近道もなく

ただ立ち止まる
ただ立ち止まる
決して後ろは振り返らず

ああ
まだ姿なき私に届け
今より大きな私に届け

少しだけ
自分の心撫でよう
「頑張ってるはずさ」

決して後ろは振り返らず
俯いた顔を挙げる
光溢れる方を指す
孤独の小径の途中

“ 星屑その6 ”

『 子供のよう に 』

あなたを想うと
涙が出そうになる

泣きたいくらい
恋焦がれてるのは
私だけなのかも

それでも構わない

恋は

愛されるより
愛する方が
より深い醍醐味よ

それでも悔しいのは

愛するより

愛される方が
居心地が良いことね

幾つになっても
子供のよう に

『……………』

…一緒に…

…生きていけたなら…

…あなたの…

…笑顔だけを…

…守れていたなら…

…こんなふうに…

…重い鉛を抱えたまま…

…ひとりで空を…

…眺めずに済んだのに…

…あの言葉を…

…あの顔を…

…忘れられない…

…もう河を渡れない…

…もう夜は訪れない…

…あなたの…

…私を呼ぶ声だけが…

…すべての距離を越え…

…耳と心に届く…

…そしてあなたにも…

…私の祈りが…

…木霊しているはず…

…無言の声…

…無音の祈り…

…まるでふたりには…

…もはや言葉さえ…

…要らない事を…

…知らせているように…

…ああ…

…愛おしいひと…

…なすべなかった…

…私達には…

…どうする事も出来なかった…

…取り戻せない…

…時間は戻らない…

…今こうして…

…眠れない心を…

…葬るだけ…

…広い空行く鳥のように……深い海沈む魚のように…

…道端の誰知る事ない花のように…

…迷子になった事さえ気付かない子猫のように…

… 私達の恋は…

… 星屑の歴史の中…
… 埋もれてゆく…

… …。

… …。

“ 冬情景その4 ”

『 欲望 』

その涙は誰の為？

その祈りは誰に捧げる？

… 少なくとも

僕の為じゃない

君を好きだとも伝えずに

君を束縛したくて

… そうだよ

わがまま以外の何でもない

仮にいつか

望む関係になれても

心はロープで縛れない

君のその横顔

見てるだけで胸が焦がれる

僕が乗っているのは

沈没する船

君を

もがきながら求めて

でも君がいるところも
多分

底の見えない湖

：だからこそ

その涙 その祈り

僕の為ならよかったのに

僕なら君を泣かさず

いつでも慈しんで

それでも

望まずにいられない

君がいつか

酷い目にあつて

僕を求めることを

それこそ

酷い奴だとわかっていても

『想いを編んで』

見えないよ

きみの後ろ姿が

涙で見えない

きみの笑顔を

きみの言葉を

焼きつけたくて

いつも小さく開いた窓からきみを見送ってたけど

きみが私の気持ちを

迷惑でなかっただけで

満たされた

…ゴメンね

最初で最後だね

きみから離れた道に行く

あの歩道橋

あのアスファルト

あの夕焼け

…あの雪景色

目を懲らすと

きみと私が見えてくる

戯れ寄り添い

きみからもらってた

やさしさを

繰り返しかみしめて

どこまでも途絶えない絆

ふたりの心を編んで

たとえひとりになっても

あの日のように

涙で何も見えなくても

あの星空

あのバス停

…あの雪景色

想いを

想い出の中に編んで

“ 刹那 その3 ”

『春空の追憶』

運転席から空を見た
ひつじ雲の春の空
跳べない柵を探す

もうすでに
かの春は遠く

どこまで見上げても
あの春空は映らない

あの頃
助手席に慣れて
同時に
あなたの横顔を見慣れた

いつまでも
夢だけを
語るに飽きない日々

その憂いさが
その儚さが
そのまま
ふたりの距離だった

『波音』

こうして

何も言葉交わさなくても

あなたのそばは

居心地がいい

こうして

小さくつないだ指だけで

私は深く

満たされる

近くて遠い

この距離が

多分ふたりの

さだめ
運命だった

それを泣いた日も

もう意味を持たない

そんなものは

もうふたりに要らない

ただ波音に身をゆだね

このまま

夜を見送ろう

『クリア』

これは戒め
二度とあなたを
縛らぬように

これは戒め
自分の立場を
見極めさせる為の

忙しさにやつと
あなたを振り払えたのに

届いた手紙
真白ななかみ
宛名だけが
私に問い掛ける

“あの指が
この字を書いた”
あまりにクリアな記憶

眩暈がするほどの
懐かしさに
甦る慕情

…でもとか
…だからとか言いたくない
こんなにあなたを
何十年経っても

あの頃のまま
忘れられない私

どこまでも
どこまでも
どこまでもクリア

これは戒め
もう二度とがない為に
私に課せられた

宛名だけの
あなたの文字を
もう一度破いて棄てる

このクリアな記憶だけが
ただひとつ
私に遺る

どこまでも
どこまでも
どこまでもクリア

“ 道標その9 ”

『 放物線 』

誰もいない交差点

早朝

私だけが曲がる

描いた放物線は

あの日の

飛行機雲のよう

決めたの

この街を出る

車の窓には

たくさんの水滴

まるで花模様

だからもう

泣かない

この放物線が

いつかの虹になるまで

あなたから離れ

この街を出る

『予感トレーニング』

毎夜毎夜

あなたから

「ゴメン」と言われるのを
頭のなか繰り返し返す

いつか

その日がきても
慣れていられるように

毎夜毎夜

あなたへの

「許して」と嘆くのを
頭のなか繰り返し返す

いつか

その日がきても
心揺らがないように

こんなにこんなに

つらい思いを連ねても

あなたを
あなたを

言えないわ

聞けないわ

言い訳しないけど

聞き分けも悪い

「さよなら」だけは
どうしても

『無恥』

夕焼けのひかりが痛い
太陽より真っすぐ見れない

あらゆるものに
たくさんのひとに
懺悔があつて

私は立ち尽くす
許せなかった自分が
あまりに小さくて

足もとから伸びる影が
呪縛から解放しない

鞭をうつ
無知な自分
もつと無恥な自分に

ああ だけど
やさしかった
やさしかった
あの人もあの人も
…あなたも

いつか

この救われない懺悔は

海より深い祈りになるのだろうか

心に絶え間無く

鞭をうつ

無知の残酷

もつと酷い無恥の哀しさ

夕焼けの眩しさが痛い

届かない想い

いつそ

最初から不在^{なか}だったことにできるなら

“星屑その7”（前書き）

樹歩です。お久しぶりです。いつも私の詩を読んでいただいて、深く感謝しています。ありがとうございます。

“ 星屑その7 ”

『 あの日、の月 』

サンルーフ開く
明るい夜空

まっすぐ見下ろす
あの月が

あの日と違う月だなんて
間違いに決まってる

あの日 あの人と
あの夜空を

もうあの日には
二度と来ない
私にも あの人にも

もうあの月は
光を照らさない
私にも あの人にも

『 あたたかな宝石 』

… あなたとの別れが
この世で一番

つらい事だと

思っていたけれど

… 遠いあの人との
思い出のように

やり切れなさで
追い詰められると
思っていたけれど

… それは間違い
そんなことはないのね

私は今

抱いている

笑みしか浮かばぬ
あたたかな宝石を

淋しさより

哀しさより

あなたを

愛せたことの方が

苦しみより

切なさより

あなたと

出会えた運命の方が

ずっと大きな

意味をもつのだと… ずっと尊い

価値があるのだと

どれだけの

偶然を流しても

あなたとの

時間だけは必然で

それはまるで

あの人との

あらかじめ定められた

恋のように

私は今

抱いている

あの日の

星空を

夕暮れを

桜並木を

海辺を

野道を

… 残像を

それは私だけの

あたたかな光り

私だけの

あたたかな宝石

いつまでも

あなたに幸多からん事を
祈ってゆく

いつまでも
あの人に光り降り注ぐ事を祈ってゆく

私の宝石は
あたたかな宝石は
永遠に
輝き続けて

決して
色褪せる事はない

いつまでも
永遠の輪廻の
祈りを捧ぐ

“ 刹那その4 ”（前書き）

二度と起きてほしくない事が起きてしまいました。天災や自然の猛威には、人は成すすべがありません。それでも人は希望を棄ててはいけないのですね。だから私は祈ります。大切な友達を含む、被害に遭われたすべての人達へ…

樹歩

“ 刹那その4 ”

『 日時計 』

あなたを思いめぐらし

私は今日も

空を見上げる

遠くへ伸びる

私の影は

まるで

日時計の針の様です

ああ どうしたら

あなたの笑顔を

思い出せるのかな

思い出が

眩しすぎて

今の私には

立ち尽くすしか

すが無いようです

どこへも辿り着けない

日時計の様に

『勘違い』

その寝顔を

独り占めしたくて

抱きしめても

いつも目線が迷ってて

きみは本当は

何処へ行きたかったの？

本当は何処へも

行きたくなかったのかもしれないね

手放すよ

きみを此処から

苦しいよ

きみを泣かすよ

きみから聞くのが怖いから

本当に

必要な人の名を

僕じゃない……

きみより先に気付いた

勘違いに

きみを泣かすよ

それくらいの
仕打ちは許してよ

『地震』

そのニュースを
見るたびに
全身が凍りつく

すべてを放り出して
確かめたくなってしまう

私の
大切な大切な人達

私の
大切な大切な故里

あの山が
どこまでも続く野原が

あの河が
手の届きそうな星空が

地球の眩暈で
歪み離れてしまう

…神様

どうかこれ以上

あの人達を

我慢強くさせないで

どうかこれ以上

眠れぬ夜を与えないで

必要なのです

あの笑顔が

あの景色が

どうかもう二度と

胸軋むニュースが

流れないように

彼等が積み上げて来た物がなにひとつ
壊れないように

なにひとつ

失うことがないように

“ 恋心その 8 ”

『夏の出来事』

何気に見上げると
高い空に小さな光り
あれは飛行機

何故だろう

一瞬

あなたを思わせた
手の届く事のない恋人

夜の道路 みち

信号の明かり

アスファルトを照らす
私の心にも

あの夏の日

あれは本当の事なのに
今にしてみれば

事実もまぼろしも
紙一重だね

ただの “ ある日 ”
ただの “ ある事 ”
ただそこに

夏があつただけ

『枯山水』

無くしたものは
ないはずなのに

あなたへの想いは
私の中で
永遠に色褪せない

いつかの日は
いづれ忘れ去られる

今こうして
目の前の河
水の流れがあつた事が
嘘のよう

私の想いは
多分泉水に満たされ
いつかの夜
溢れていたはず

今こうして
雫の欠片も見当たらない
枯山水にも

本当はどうしたいの？

本当の声を探す

目の前の

水の無い河に

“私は何処へ？”

“何処へ行けば辿り着けるの？”

なくしたものは

何もないはずだった

無いはずのものを

いつの間にか探して

目の前の

枯れた河に

問い掛ける私

“あの日々は事実なの？” “あなたの中で本当にあった事なの？”

どこまで続く喪失

どこまでも追う恋慕

私の想いは

色褪せる事さえ出来ずに

目の前の

水の無い河

あてもなくさ迷う

“心は何処へ？”

“あなたの心は何処まで？”

何も無い喪失を抱え
枯山水は
ただそこにある

いつまで
何処まで
流れの無い河
私と同じ

“ 深海その1 ”（前書き）

自分の人生に、本当に大切なものと、1番守りたいものと、心底愛しているものが、いつも同じものでなく、しかも同じ線上にすらないこともあるのですね。いつも私の詩を読んで下さるすべての人達に感謝します。あなたの明日が今日より良い日になりますように。

樹歩

“ 深海その1 ”

『泣けない鳥』

あなたを

ただひたすら

愛し続けて

その腕に抱かれ

撫でられることだけ

夢みて

泣き叫んでも

あなたは遠いよ

私は今日も

メロディに合わせて

鳴き続ける

泣けない鳥は

鳴くことでしか

愛情を表せない

あなたの耳が

私の唄を拒んでも

どうかどうか

あなたの幸せを

祈らせて

ルルル：

『 抗い 』

これが

運命さだめなのなら

潔く

受け入れましょう

海の底に映る

空のかけらのように

あなたの中を

漂いつづけるしかない

外は嵐

もうこんな風に

誰かを深く

求める事を望まない

どんなに抗っても

忘れられない

身悶える恋慕に

立ち尽くすしか

術すべもない

この
降り続ける雨にも
あなたを
探してしまう

今まで

多分にしていたけれど
きつとしか言えない

これが
私に決められた事

あなたの存在を
心の底に抱きつつける

この想いが
せめて二人同じなら
…それはまぼろし

海の底に映る
碧い空のかけらのように
忘れられそうな私

あなたの中を漂う

これ以上
誰かを
深く深く深く
求める事を望まない

『他国の路地』

いつもと違う

漠然と込み上げる不安

あなたの心が

定まるはずもない

そんなことは

たいした意味はない

わかつてる

ただ私だけが

愛しただけなのに

ほんの少し

頬杖の角度が

変わっただけで

この胸の沈む鉛に

戸惑いを否めない

まるで

知らない国の路地裏で
迷っているみたいよ

“道標その10” (前書き)

言葉という便利が、時には本当に伝えたい気持ちに不便なものであると最近気がつきました。いつも読んでくださるすべてのかたに感謝します。 樹歩

“ 道標その10 ”

『 角砂糖 』

あなたがくれた
私への愛情は
まるで

角砂糖のようでした

いつも
いつも

一瞬で溶けてしまう

私の

あなたへの愛情が

熱すぎて

強すぎて

きつとほんの少し

温^{ぬる}い方が

よかったのかもしれないね

『 登下校（電車編） 』

今日は逢えるかな
あなたに

すれ違う電車の窓越し
一瞬crossする眼差し

私は伝えようと

沢山の言葉を

一瞬の視線で

毎朝

毎朝

あなたは伝えてくる
ただひとつの言葉を
窓ガラスを突き抜け

毎朝

毎朝

「逢いたいの」

「声を聞きたいの」

「抱きしめてほしいの」

「知ってるよ」

「知ってるよ」

「誰よりも知ってるよ」

あなたの降りる駅を

私は知らない

私の歩く坂道を

あなたは知らない

やっぱり

同じ学校がよかったね

そしたらこんな風に

毎朝

毎朝

ややこしい思いを

しなくてすんだのに

ふたりがもう少し

素直だったなら

『愛しい思い出』

懐かしいって

本当は

言いたくないの

私の中で

あなたという存在は

思い出じゃないし

過去でもないから

でも

逆らえないね

確かに私たちは

大人と呼ばれるようになり

ずいぶん多くの
柵しがらみを

かかえるようになった

今のあなたに

大切なものがあるように

今の私にも

自分より守るものがあつて

だけど

眠れない夜は

あなたとの

あふれる程の共有に

私は心みをまかす

いつまでも

いつまでも

色褪せないひとに…

懐かしいなんて言葉

不似合いな程

今のあなたにも

こんなに愛しい

“ 星屑その9 ”

『理由』

どうにもならないことを
何度も

なすべないままに
行ったり来たり

ここから見る

夕焼けは

やけに朱くて

私が

追いかけて焦がれてるのは

あの人なのか

あの頃なのか

多分何事にも

理由があるはずなのに

何処へも行けないまま

途方にくれる涙

きつと今夜は

降るほどの

星空が包むだろう

誰よりも

愛おしいはずの人
どうか

いつまでも
私より倅せで

今気がついた

これだけで

泣ける理由になるね

夕焼けは朱い

星空はキレイ

それだけでも

充分なはずだけど

『桜散る追憶』

桜散る散る

あの坂道を

あなたの後ろ姿を

ただ

見つめ続けて

季節逝く逝く

あの風景に

いつれ来る別れを

ただ

忘れたふりして

伝える言葉

あつたはずだった

いつも

必ず後ろを

探してくれていたのに

どうしても

どんな言葉を並べても
伝えきれない気がして

想いを

花びらに乗せて
舞い上がらせました

花びら散る散る

すべてを

追憶の果てに

桜散る散る

もしかしたら今も

あなたの上に

降り続けるかもしれない

『癖』

何故だか

わかることなんて

永遠に

こないだろうけど

幾年言葉も交わさず

見かけることさえ

ないあなたを

理由なく

理屈なく

信じられるなんて

もはや愛情を越え

きつと信頼をすぎて

私たちの心は

行き着くところまで

来てしまったんだね

ポケットの中

手をいれて歩く

あなたの癖のように

“ 深海その2 ”

『 苔はえる舌 』

「あなたに逢いたい」
その一言が
どうしても言えない

困るあなたを
知りたくない

今

こうしてる間も
とまることなく
あなたを募らせてるわたし

それが気に入らない

あなたに
聞かせたいのは

澄みゆく空の様な
暖かい暖炉の様な
癒される波の様な

そんな言葉なのに

無意識に

増殖するエゴ
時にあなたを
傷つきたいほどの
無恥な想い

わたしが
抱えるこの恋慕を

あなたがわたしに
思ってくれるなら

傷つくのも怖くないのに

わたしだけが

この舌に

苔を生やしている事が

たやすく

想像できてしまう

「逢いたい」

「あなたに逢いたい」

きつと言えない

この先も

『永遠の未来』

本当は

信じたいんだけど

このままふたりが
どこまでも

同じ舟に
流されてゆくと

あなたの手

絡める指

この温かみだけは
失いたくない

知ってるよ

いつか なんて日は
決して来ない

永遠に

憧れだけの未来

あなたが今

私に向けてる
その微笑み

遠くで

群れゆく沢山の羊
眩しい空

気付いてるよ

知らないふりしてたの
この舟には

埋められない亀裂が

私が

本当に欲しいものは
手にできない

それは運命^{さだめ}

永遠に

絵空事の

憧れの果ての未来

知ってるよ

ゝ いつか なんて日は
決して来ない

あなたにも

私にも

決して来やしない

本当は

信じたいんだけど

この舟が

決して

沈まないことも

あなたが

私だけを

愛してくれることも

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1409b/>

詩集 想いを羅列

2010年10月9日17時40分発行